

令和元年6月18日現在

機関番号：32630

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02314

研究課題名(和文)近代英国のエンブレムと宗教文学の相関性に関する研究

研究課題名(英文)Relativity between Religious Literature and Emblems in the Early Modern England

研究代表者

松田 美作子(Matsuda, Misako)

成城大学・文芸学部・教授

研究者番号：10407611

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：近代初期英国において、「大陸」のカトリック派のエンブレムを基にしたプロテスタント派のエンブレムブックが作成され、宗教改革に貢献したことを踏まえ、同時代の文学に与えた宗教的エンブレムの影響を追及した。このために、16、17世紀の英国のエンブレムブックおよびエンブレムの応用表現である装飾芸術を調査した。主なものは、フランシス・クォールズの『エンブレム集』(1634年)である。国教会派を問わず、新旧派に受け入れられたクォールズなどを用い、シェイクスピアのハムレットとプロテスタント派の瞑想との関連を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

近代初期英国において、「大陸」で大流行したエンブレムが取り入れられ、視覚文化や文学に大きな影響を与えた。図像と言語の両方を用いたバイメディアルなエンブレムは、視覚芸術や言語芸術を理解するうえで、単なるイメージの材源ではなく、作品の根幹をなす重要な意味を示唆する。この点を追求するために、いくつかの海外図書館においてエンブレムブックの調査を行った。とくに英国では、イエズス会の瞑想の方式をプロテスタント的に適用したフランシス・クォールズの『エンブレム集』(1634年)が作成され、これらを用いて、シェイクスピアの『ハムレット』のユニークな宗教的側面を明らかにすることができた。

研究成果の概要(英文)： The purpose of this study is to investigate how English protestant emblems, which were based on continental Catholic emblems contributed to the English Reformation, and clarify their effects on the contemporary literature.

Understanding the quality of continental religious emblems, doing research on the sixteenth and seventeenth century emblem books are necessary. The most important emblem book is The Emblems of Francis Quarles (1634). This had been published more than two hundred years. After doing research at Glasgow University, British Library, and Folger Shakespeare Library, it becomes clear that several religious emblems including Quarles's, are important to Joseph Hall's method of meditation. Hall is famous for establishing the protestant method of mediation, and I use Hall and the religious emblems to analyse the meditative aspect of Hamlet.

研究分野：近代初期英国の視覚文化および文学

キーワード：宗教的エンブレム 視覚文化 プロテスタント フランシス・クォールズ シェイクスピア

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 近代初期英国の文学や文化を理解するのに、同時代のエンブレム文学を援用する試みは、人文主義的な側面では研究が進んできた。代表者は、シェイクスピア劇におけるエンブレムの応用に関しては、神話や古典に基づいた人文主義的なエンブレムの表象が、シェイクスピア劇の主題に深く関連した点を明らかにしてきた。しかし、同時代の宗教文学におけるエンブレムの影響については、ジョン・ダン、ジョージ・ハーバートなど、個々の詩人についての考察はあるものの、「大陸」の宗教的エンブレム文学を含めた包括的な視点による考察は未発達であった。17世紀前半の英国は、ピューリタン革命が起こり、国教会派、非国教会派ともに大きな変革を経験した。こうした激動の時代に、英国にもたらされた「大陸」の宗教的エンブレムがどのように受容されたのかを追求することは、同時代の文学や文化のさらなる理解への前提となる。

(2) 16世紀後半から17世紀英国において出版された宗教的エンブレムブックの中には、フランシス・ウォールズのように、ポピュラーで研究の進んだ作家もいるが、まだ十分研究されていない作家もある。彼らについて調査を進めることで、エンブレム文学の全体像を把握することが必要である。宗教的エンブレムのなかでも、イエズス会が大量に出版したエンブレム文献のファクシミリ版の出版が続き、研究がより身近になったこともあり、成果が期待できる。

2. 研究の目的

(1) 近代初期英国のエンブレムにおける神的愛などの表象が、宗教文学に与えた影響について明らかにする。英国では、「大陸」のカトリック派の図像に国教会派の詩人がテキストを付して出版されたフランシス・ウォールズの『エンブレム集』(1634)のように、新旧両派から受け入れられ、独特な宗教的エンブレムが作成された。それがプロテスタント派の瞑想に利用されたことを明らかにし、この時代の宗教文学の特質を見出す。

(2) 16世紀後半から17世紀前半までの英国における宗教的エンブレムを、「大陸」のイエズス会派のエンブレムと比較検討し、それらをどのように受容し、変容したのかを明らかにし、カルヴァン派の影響が大きいといわれる国教会派の信仰について、エンブレムという表象文化を用いてアプローチする。反宗教改革派のバロック的な図像が、偶像崇拜を嫌うプロテスタント派に、受け入れられたのか、受け入れられなかったのか、受け入れられたとすれば、その理由は何であるのか、追及する。

3. 研究の方法

(1) 英国で出版された初のエンブレムブック、『俗人の劇場』(1569)の作者、ヤン・ファン・デル・ヌートをはじめ、「大陸」の宗教的エンブレムを借用した英国のエンブレム作家について調査し、それらの図像を項目別に整理する。そして、同時代の詩人のコンコーダンスを用いて、各項目との照合を行う。特に、美徳、悪徳に関する擬人像を中心に整理する。そして、同時代の宗教文学の特質を明らかにするために、宗教詩人のみならず、ジョゼフ・ホールのような宗教家の著作を参照し、プロテスタント派の瞑想の方式に、エンブレムがどのように利用されたのかを明らかにする。

(2) 近代初期英国における「大陸」の宗教的図像の受容と変容を考察するため、グラスゴー大学図書館、大英図書館、フォルジャー・シェイクスピア・ライブラリーなどに所蔵されているエンブレム写本の調査を行う。また、「大陸」のエンブレム・プログラムを用いた建築、絵画、彫刻作品の残る南フランス、フィレンツェなどで現地調査を行い、宗教図像の伝播を追求する。

4. 研究成果

(1) 2015年度から2018年度に渡る4年間の研究において、前半2年間では主にスコットランドにおいて宗教的エンブレムの調査を行った。具体的には、グラスゴー大学図書館のスターリング・マックスウェル・コレクションにおいて、フランシス・ウォールズの17世紀から19世紀までの諸版を比較検討し、このエンブレム本が一貫して英国の宗教文化に大きな影響を与えた点を確認した。この点は、スターリングの教会墓地の17世紀の墓石に彫られたウォールズのエンブレムの図像や、カーロス・パレスの天井画装飾のホイットニーのエンブレムなど、スコットランドの物質文化に残されたエンブレム図像によっても確認できた。この成果は、2016年、『成城文藝』に発表した。

(2) グラスゴー大学は、英国のエンブレム研究の拠点であり、当地のエンブレム研究グループとの交流によって、上記のような現地調査が可能となったのだが、カーロスのように海運貿易で栄えたスコットランドやイングランドとネーデルラントとの交流を追ううち、16世紀終わりから17世紀にかけてネーデルラントのエンブレムブックが、日本に知られていた事実に行き

当たった。そこで、グラスゴー大学スターリング・マックスウェル・セミナーにて、2017年3月、日本におけるエンブレムの受容について発表し、英国のエンブレム研究者と意見を交わすことができた。このセミナー後、さらに研究を進め、2017年10月、日本比較文学会東京大会にて江戸期の蘭学者のエンブレム理解が西欧的な寓意表現の基盤を形成した可能性を発表した。この成果は、『成城文藝』246号に掲載された「近世日本におけるエンブレムの受容 蘭和辞書と動物寓話を中心に」としてまとめた。

(3) 2017年7月に、フランスのナンシー大学にて国際エンブレム学会が開催された。学会の日本支部代表として連絡会議に出席するとともに、エンブレム研究の最新の成果を知る機会となった。とくに、物質文化におけるエンブレムの地域研究が、飛躍的に発展していることを知った。南米諸国における植民地時代の教会内部に残されたエンブレム・プログラムによる壁画装飾など、改めてイエズス会が布教のためにエンブレムを活用していたことを確認できた。さらに、ナンシー市立図書館に収蔵されている『フィジオリゴス』をはじめとした大量のルネサンス期のフランスで出版されたエンブレム本を調査できた。「大陸」のエンブレムを借用したエンブレム本から借用することの多い英国のエンブレムを理解するうえでの有効な資料収集が行えた。

(4) これまでに収集した資料の分析をし、具体的な文学作品との影響関係を追求した。エドマンド・スペンサーが英訳したヤン・ファン・デル・ヌートの『俗人の劇場』の黙示録的なソネット連作が、以後のスペンサーの反カトリック的な立場での創作に影響を与えたことを確認した。さらに、シェイクスピアの『ハムレット』を宗教的側面から考察するのに、クォールズのエンブレムや、ジョゼフ・ホルの確立したプロテスタント派の瞑想方式を援用することによって、ハムレットの運命を新たに解釈できた。この成果は、2017年9月、「Devotional Emblems and Protestant Meditation in Hamlet」として、国際学術雑誌、English Studiesの98巻に発表した。

(5) 後半2年間では、主にクォールズの『エンブレム集』の研究を進めたが、彼が「詩篇」の翻訳を試みていたことを見出した。当時のイングランドやニュー・イングランドにおいて「詩篇」は讃美歌として礼拝で広く親しまれていたことから、クォールズなどのエンブレムと「詩篇歌」の関連を考察した。この成果は、2018年発行の『17世紀の革命/革命の17世紀』中にて発表した。この成果は、「詩篇歌」がプロテスタント派の信仰にとって果たした重要な役割について、更なる研究が必要であると考えている。

(6) クォールズらプロテスタント派のエンブレムブックは、ヘルマン・フーゴなど「大陸」のカトリック派のエンブレムを借用して作成されている。そこにはマリア信仰に根ざしたマリアン・エンブレムもみられる。英国ではイエズス会士、ヘンリー・ホーキンスの『聖なるバルテネイア』(1633)がその代表作であるが、カトリック派の図像の伝統を調査し、プロテスタント派のエンブレム理解に結び付けるために、聖母マリアの表象を中心に調査を行った。2018年、南フランスのエクス・アン・プロヴァンスのソーブール大聖堂のニコラ・フラマン作「燃ゆる柴の三連祭壇画」における炎の中の聖母子像は、言うまでもなく出エジプト記(3:1-12)に想を得ているが、燃えてもなくなる柴は、マリアの処女懐胎を表象しており、こうした炎のなかの聖母子のようなマリアの玄義図は、イエズス会の世界布教におおいに利用され、日本にも2点のみ「マリア十五玄義図」が現存しているほどである。このような絵画と、ヤン・リュイケンの『イエスと魂』(1678)中のエンブレムとの関連がみられることを見出したが、さらに宗教的エンブレムとの相関を調べたいと考えている。また、聖母マリアとともにバロック芸術に好まれた改悛した罪びと、マグダラのマリアは、当地に伝説や墓所が残っており、改悛のち、女性の教育にあたったといわれるマグダラのマリアに関して、書物(聖書)を読む図像を収集することができた。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計3点)

松田 美作子、近世日本におけるエンブレムの受容 蘭和辞書と動物寓話を中心に、成城文藝、査読有、246号、2018、pp. 36 - 52

松田 美作子、Devotional Emblems and Protestant Meditation in Hamlet, English Studies、査読有、Vol. 98、No. 6、2017、pp. 562 - 584

松田 美作子、墓石に彫られたフランシス・クォールズと「詩篇歌」 - 近代初期英国におけるプロテスタント派の瞑想を巡って、成城文藝、査読有、237/238 合併号、2016、pp.80 - 104

[学会発表](計2件)

松田美作子、The Reception of Zinnebeeld in the Intellectual History of 18th-century Japan, Glasgow Emblem Group, 2016

松田美作子、江戸期におけるエンブレムの受容 動物寓話と Sinnebild、日本比較文学会、2016

〔図書〕(計 1 件)

松田美作子 他、金星堂出版、17世紀の革命/革命の17世紀、333

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号(8桁)：

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。